



縄文土器 深鉢

揖斐郡揖斐川町 戸入村平遺跡出土
縄文時代中期
岐阜県文化財保護センター所蔵

土器上部の外面に張り出した部分には、上や横を向いた突起や、粘土ひもを細かく刻む文様が見られます。新潟県などで多く出土する火焰土器を彷彿とさせる立体的な装飾が施されていることから、「奥美濃の火焰土器」と称されることもあります。

戸入村平遺跡がある旧徳山村は、発掘調査により縄文時代のくらしの様子が次々と明らかになり、現在では県内屈指の縄文遺跡群として知られています。
(企画展「縄文人のくらしと心—岐阜県の発掘調査から—」にて展示)

企画展

縄文人のくらしと心 —岐阜県の発掘調査から—

2019.8.1(木)～9.23(月・祝)

近年、縄文時代がブームだと言われています。縄文人が作りだした土器や土偶などが持つ作品の美しさや愛らしさ、石器に見る石材への知識や高度な製造技術、争いのない平和な社会、身の回りにある自然を最大限に利用したエコな生活など、様々なイメージに魅了された人が増えてきていることが理由の一つとして考えられます。こうした縄文時代にまつわる情報は、全国各地で日々行われている発掘調査の成果の蓄積によって明らかにされた、くらしの様子に基づいたものといえるでしょう。

岐阜県内における縄文時代の遺跡調査からも、土器や石器などの出土品や貝塚などのくらしの跡から縄文人の生活が次第に明らかになってきています。中には、関東地方や北陸地方、近畿地方など他の地域の特徴を持つ土器や、遠隔地にしか存在しない材料を用いた石器など、他地域との交流があったことを裏付けるものも多数見つかっており、東西の文化が入り混じる今日の岐阜の原点ともいえる姿が垣間見えます。また、勾玉や土偶などの祭祀具や土器の文様やフォルムにみられる造形美からは、縄文人のセンスが感じられるだけでなく、そこに込められた願いについても想像することができます。

今回の展覧会では、これまでに県内各地で行われた発掘調査の出土品や土器・石器の製造工程の復元などを通して、縄文人の道具づくりの技術、縄文土器の持つ魅力、他地域との交流、縄文人の精神世界を紹介します。

以下、展示資料のなかから主要なものをご紹介します。



山形土偶

(縄文時代後期 高山市 西田遺跡出土
岐阜県文化財保護センター所蔵)

名称は頭部が山の形を成していることに由来します。胸と腹部のふくらみが強調されており、体の中央には妊婦に見られる正中線のような線が表現されています。出産が命がけだった当時、母子の健康を願った祈りの道具だったのかもしれません。



玉

(縄文時代中～後期 揖斐郡揖斐川町 塚奥山遺跡出土
岐阜県文化財保護センター所蔵)

穴にひもを通しペンダントのように使っていたと考えられています。科学分析の結果、石材には新潟県・糸魚川産のヒスイを使用していることが判明しており、県内へのヒスイの広がり的一端がうかがえます。



県重要文化財 縄文土器 深鉢

(縄文時代中期 各務原市 炉畑遺跡出土
各務原市埋蔵文化財調査センター所蔵)

咲畑式という、各務原市や美濃加茂市など木曾川中流域を中心に栄えたタイプの土器です。口縁をおよそ八等分したところに渦巻文があり、渦巻文同士が沈線によって繋がっています。



重要文化財 縄文土器 釣手土器
(縄文時代中期 飛騨市 中野山越遺跡出土
飛騨市教育委員会所蔵)

北陸地方から関東甲信地方にかけて特に多く出土する土器で、祭祀とかかわりのある灯火具だとする解釈があります。釣手部分に連結するワラビ状の文様が押し引き文によって施文されています。



県重要文化財 動物意匠文土器
(縄文時代中期 飛騨市 堂ノ前遺跡出土
飛騨市教育委員会所蔵)

竪穴建物の床面にて出土しました。口縁には4つの波状がみられ、波頂部下にそれぞれ動物の文様が形づくられています。その顔らしき部分はハート形をしており、北陸西部地域の縄文中期前葉～中葉に流行した動物意匠文との共通要素を持っています。

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4ページで紹介した以外の分館展覧会は以下の通りです。

7月9日(火)～8月25日(日) 堀江 枢夫 写真展 ～半世紀の記憶～
8月27日(火)～10月6日(日) 第20回記念 グループ源流展

■特集展示(2階 総合展示内)■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

6月7日(金)～7月15日(月・祝) 市制130周年記念 岐阜のまちなみ今昔
～明治から令和へ～
7月20日(土)～9月23日(月・祝) 岐阜市の古墳

■分室 原三溪記念室の展示■

～7月5日(金) 杏村の山水画
7月6日(土)～8月16日(金) 歴博コレクション
8月17日(土)～9月27日(金) 加納鉄哉の絵と書

上記の日程は、都合により変更する場合もございます。ご了承ください。

加藤栄三・東一記念美術館

(公財) ぎふしん記念財団助成事業
収蔵作品でたどる
加藤栄三・東一

2019.7.9(火)~10.6(日)

当館は平成3年5月に開館して以来、本年度28年目を迎えました。その間、栄三・東一両画伯のご遺族はじめ多くの方々から作品のご寄贈をいただき、収蔵作品も約4,800点になりました。

収蔵作品の中でも素描(スケッチ、ドローイング)が多くを占めています。しかし、そのほとんどは表装されていない状態のため一般公開されていません。また、収蔵作品の中には保存状態が悪く破損した下絵や素描もあり、作品の修復は急務でした。

この事情を知り、昨年、(公財) ぎふしん記念財団から作品の修復、表装のための助成を受けることができました。

これにより本年度、表装、修復を終えた25点の下絵と素描を初公開作品として公開することができるようになりました。



加藤栄三「空(大下絵)」

今回、素描・下絵の修理、もしくは裏打ち、表装を栄三・東一両画伯の未公開作品に行いましたが、一般に文化財の修理と言われるものは、作品の調査から始まり、作品の耐久性や破損具合を見て修理や修復の方針を決め、絵の具の剥落止め、解体等々の工程をたどります。

しかし、今回の修復から表装に関しては現代作家の作品であったため基底材の劣化はなく、下絵ということもあって、彩色はほとんど施されていませんでしたので画面の破れやき裂を修復するだけで済んだのは不幸中の幸いでした。

今回、日本芸術院賞受賞作品であった加藤栄三作「空」の下絵ということから、その価値を考え表装を予定していた下絵から急遽この「空(大下絵)」の修理を優先させました。



加藤東一「風神(小下絵)」

昨年、ご遺族よりご寄贈いただいた加藤東一作「風神」は生死の問題を漠然と考えていた東一に変革をもたらした弔歌シリーズの最後の作品です。今回、「空」の大下絵とあわせて「風神」の制作にあたり東一が描いた風神関係の素描20点を表装することができました。

本画(完成作品)とあわせて鑑賞していただけると試行錯誤を繰り返しながら取材した跡がよくわかります。

本展では表装を終えた25点の素描、下絵とあわせて、二人がこよなく愛した岐阜の風物：鶺鴒をテーマに描いた本画(完成作品)、素描も合わせて展示します。

研究ノート

養老改元について

吉田晋右

1 はじめに

奈良時代における年号は、708年より始まる和銅から、782年より始まる延暦にいたるまで、＜表＞のとおり全部で13の年号が用いられている。『続日本紀』にみえる改元理由の内訳をみると、祥瑞による改元が多くを占めていることがわかる。このうち、霊亀、神亀、天平勝宝、宝亀は天皇の即位と祥瑞が同日に行われており、和銅、天平感宝、天平神護、天応、延暦についても代始や踐祚など天皇の即位との関わりがあると考えられている。

一方、養老、天平宝字、神護景雲は祥瑞のみによる改元である。いずれもなんらかの事情があったうえで改元があったと考えられるが、本ページでは岐阜が舞台となった養老改元の場合について考えたい。

2 元正天皇の美濃行幸

養老改元の詔は霊亀三年（717）十一月癸丑（十七日）のことであるが、『続日本紀』では、改元に先立って元正天皇と養老との関わりはこの年に行われた美濃国行幸に見ることができる。すなわち、行幸の行程は以下のように確認できる。

八月甲戌（七日）

従五位下多治比真人広足を遣わし、美濃に行宮を造らせる。

九月丁未（十一日）

元正天皇、平城京を出発。

九月戊申（十二日）

天皇、近江国にて琵琶湖を観覧。山陰道（伯耆・因幡・但馬・丹後・丹波）、山陽道（備後・備中・美作・備前・播磨）南海道（讃岐・阿波・淡路・紀伊）の国司が各国の歌舞を奏す。

九月甲寅（十八日）

天皇、美濃国に到着。東海道（相模・甲斐・伊豆・駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・志摩・伊賀）、東山道（信濃・飛騨・美濃・近江）、北陸道（越中・越前・若狭）の国司が風俗の雑伎を奏す。

九月丙辰（二十日）

多耆郡の多度山の美泉を訪れる。五位以上の従者に褒賞。

九月戊午（二十二日）

同行した主典以上の者と美濃国司等に褒賞。郡領以下、雑色41人に位を一階進める。不破・当耆2郡のこの年の田租と、方県・務義2郡の百姓のうち行宮に仕えた者の租を免除する。

九月癸亥（二十七日）

帰路、近江国に到着。五位以上の従者に褒賞。近江国司等に褒賞。郡領以下、雑色44人の位を一階進める。志我・依智2郡のこの年の田租と行宮に仕えた百姓の租を免除する。

九月甲子（二十八日）

天皇、平城京に帰還。

この行幸の際に訪れた多度山の美泉こそが養老の滝であると考えられており、改元の詔の中で、美泉（禮泉）は大瑞であるとして養老改元の契機としている。また、大赦・叙位・賜物などが行われた。このうち、美濃国司・当耆郡司らに位を一階加えたことにより、美濃守（尾張守兼任）の従四位下笠朝臣麻呂に従四位上、美

年 号	天 皇	改元の理由
和銅（708～715）	元明	武蔵国、和銅を献上
霊亀（715～717）	元正	左京識、瑞亀を献上、元正天皇即位
養老（717～724）	元正	元正天皇の美濃行幸時の美泉
神亀（724～729）	聖武	前年に白亀があらわれる、聖武天皇即位
天平（729～749）	聖武	左京識、背に「天王貴平知百年」と記された瑞亀を献上
天平感宝（749）	聖武	陸奥国、黄金を献上
天平勝宝（749～757）	孝謙	天平感宝に同じ、孝謙天皇即位
天平宝字（757～765）	孝謙⇒淳仁⇒称徳	駿河国の蚕の卵が「五月八日開下帝釋標知天皇命百年息」の文字を成す
天平神護（765～767）	称徳	恵美押勝の乱の勝利、称徳天皇即位
神護景雲（767～770）	称徳	慶雲の祥瑞
宝亀（770～781）	光仁	肥後国、白亀を献上、光仁天皇即位
天応（781～782）	光仁⇒桓武	伊勢斎宮にて美雲の瑞祥
延暦（782～806）	桓武	桓武天皇踐祚

＜表＞奈良時代の改元

濃介の正六位下藤原朝臣麻呂に従五位下を授けている。

改元後の同年十二月丁亥（二十二日）、美濃国に毎年立春の暁に禮泉を汲んで都に貢送するよう命じており、この水を以て禮酒とするようしている。

なお、『続日本紀』によれば、元正は翌養老二年（718）二月に、二度目の美濃国行幸を行い、禮泉を求めている。ただし、二月壬申（七日）に出発し、三月戊戌（三日）に都へ戻るまでの詳細な行程の記録はない。

3 東西諸国の国司による歌儺・雑伎について

九月丁未・甲寅に行われた歌儺・雑伎の奏上については一種の服属儀礼とする見方があるものの、三十一の東西中近国の国司が各国の歌儺・雑伎を奏することは史料上ごくまれで、異例ともいえる。

これらの歌儺が披露された場所は明らかにされていない。しかしながら、行幸に際して論功行賞を受けている地域に注目してみると、ある程度の推測はできそうである。近江国では志我郡と依智郡が当年の田租が免ぜられている。およそ、志賀郡は津市あたり、依智郡は彦根市およびその周辺に比定されている。西国の国司が歌儺を奏上した場所は、『続日本紀』によれば平城京から一日で行くことができ、かつ琵琶湖を眺めることができた場所であるから、志我郡である可能性が高い。つまり、かつて天智天皇が築いた大津京が所在した地域である。

一方、美濃国では不破郡と当耆郡の田租、および方県郡と務義郡から行宮造営に携わった者の租を免ぜられている。不破郡は関ヶ原町・垂井町など、当耆郡は美濃の所在地であり、養老町とその周辺地域と目されている。東国の国司が雑伎を奏した場所は、当耆郡の可能性は残るものの、不破郡だと推察される。改元の詔の中で不破行宮にて留連すること数日なりと発しているほか、不破郡は元正の祖父にあたる天武天皇が壬申の乱において大本営を構えた地であり、この地に行宮を構えた以上は、天武天皇や壬申の乱に関してなにかしらの意思・意図があったはずである。志我郡と不破郡において東西各国の国司に歌儺・雑伎を奏上させたとするならば、先に述べた服属儀礼以上の理由が存在すると考えられる。壬申の乱当事者がほとんど亡くなった当時、天智・天武双方の血を引く元正のもとに、壬申の乱ゆかりの地である志我郡と不破郡において各国の国司が服属儀礼を行うことで、新たな時代の到来を象徴づけたかった

のかもしれない。

4 行幸の企画者について

『続日本紀』からは、この美濃行幸の企画が誰によって行われたものなのかは触れられていないため、三人の人物から考えてみたい。

行幸が行われた霊龜三年には、左大臣石上朝臣麻呂が薨じ、実質の政府首班は右大臣藤原朝臣不比等であった。また、不比等の次男従四位下藤原朝臣房前が参議となっており、不比等に続いて藤原氏から二人目の議政官となっており、藤原氏の勢力が拡大しつつある時期であった。

美濃国では、慶雲三年（706）以来十年以上にわたり笠朝臣麻呂が美濃守を勤めている。麻呂は在任期間中に東国への重要な道路であった吉蘇道を開通させ、三関の一つに数えられる不破関の整備にもおそらく関与していたと考えられているなど、大宝律令成立期における美濃国の礎を築いた立役者といえる人物で、特に吉蘇道開通の業績は後世に優れた業績の代名詞的に語られるなど、政府にとって重要視されていたことと考えられる。また、行幸前年の霊龜二年（716）には尾張守にも任ぜられたことも政府から厚い信頼を得ていたことの表れであろう。また、美濃介の藤原朝臣麻呂は不比等の四男であり、行幸当時従六位下であったが、改元後には四階すすめて従五位下となり、貴族の仲間入りを果たしている。当然この昇叙は不比等の意向が強く表れていたものと思われ、その実現のために笠麻呂・藤原麻呂と共同でプロデュースしたものであると推測する。

5 むすびにかえて

以上、ここでは服属儀礼にみる元正政権の在り方を示そうとした可能性と、行幸・改元による昇叙を利用して自勢力の拡大をはかった藤原氏の思惑の可能性について考えたが、少なくとも行幸先で美濃に感動した勢いで改元というシンプルなことではなく、様々な政治的な意図を十分にはらんだ行幸・改元であったことは再確認できたことと思う。まだまだ精査・検討すべき課題は多々あるが、ひとまずここで擱筆することとしたい。

主要参考文献

野村忠夫『奈良朝の政治と藤原氏』（吉川弘文館、平成7年）

井上亘「元正女帝期政権論」（『学習院大学人文科学論集』、1号 平成4年）

平成 30 年度受贈資料

平成30年度は、表記の皆様にご貴重な資料をご寄贈賜りました。
厚くお礼申し上げます。(敬称略)

芳 名	受 贈 資 料	
松野 千尋	差上申一札之事	1 巻
早矢仕 一安	岐阜市土地宝典 昭和 8 年	1 点
渡辺 紀久雄	水車	1 点
山本 峯子	最近の東亜形勢図解 昭和12年 1 月 1 日 大阪毎日新聞附録 最新日本鉄道地図 昭和11年 1 月 1 日 大阪毎日新聞附録 全国鉄道地図 洗たく板	1 点 1 点 1 点 1 点
日比 次郎	海軍飛行予科練および海上保安庁関係資料	一括
三輪 義弘	岐阜金津 花魁道中絵はがき	1 組
泓 ともえ	坂井田永吉本店のタオル	1 点
中村 美智子	番蛇の目傘	1 点
炭竈 美恵子	寄附金芳名簿 (関谷国治胸像建設)	1 点
辻田 文雄	野口家関係資料 岐阜県管内略図	一括 1 点
川村 浩子	市内店舗チラシ類 鵜飼・岐阜城観光パンフレット	一括 一括
服部 京子	服部家近代文書	一括
川並 秀賢	日置江村小作争議及び予算資料 無線電話許可証 凱旋盃 教科書 古写真	一括 1 点 一括 1 点 一括
横山 律子	長谷川教三氏関係資料 (満州引揚・学校資料)	一括
伊藤 綾子	店舗作成マッチ箱	一式
河合 真実子	昭和20年代の紙芝居 教育用幻灯機フィルム	一括 一括
高橋 謙蔵	足踏みミシン	1 点
足立 富子	千人針	1 点

***** 館 蔵 資 料 紹 介 *****



(左) 鱗屋看板

明治時代
寸法：45.0×60.5cm

(右) 鱗屋外観

昭和5年(1930)6月末撮影
寸法：10.8×15.3cm

平成30年(2018)度特別展「長良川が育む 竹の造形 和紙の彩 ―岐阜の伝統工芸とわざ―」に出品された資料を含む傘問屋・鱗屋(岐阜市靱屋町)の資料群が、令和元年(2019)5月当館に寄贈されました。

鱗屋を営んだ宮嶋家は江戸時代からの傘問屋で、番傘・蛇の目傘・小傘などの雨傘を扱っていました。資料群には、店の看板や和傘の材料だけでなく、明治20年代から昭和20年代にかけての材料の仕入帳や販売記録、和傘の価格表などを含みます。

右の写真は、昭和5年(1930)に撮影された鱗屋の店頭の様子です。明治24年(1891)10月28日に発生した濃尾震災で焼失した店舗は、12代助三郎がわずか5日間で再建し、昭和5年(1930)に改築するまで使用されました。

また、岐阜県傘同業組合長も務めた12代助三郎には、岐阜県傘同業組合からの感謝状が残されています。そこには岐阜県産の傘輸出について、従来貿易商を通じていたものを、同氏の斡旋で岐阜県傘同業組合から直接ハワイへ輸出できるようになったと述べられています。

息子・13代助三郎も、日本和傘工業組合联合会理事長、全国和傘商工業協同組合理事長などを歴任し、戦後には岐阜傘授産所の経営に尽力しています。

和傘商人に関するまとまった資料は他に例がなく、その中でも中心的な働きをしていた宮嶋家の資料は、近代における和傘流通・生産の様子を伝える貴重な資料と言えるでしょう。

利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日)

(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※歴史博物館は改修工事等のため、2019年9月24日から12月16日まで休館します。

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** (団体は20人以上)

歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館

高校生以上 300円(団体240円)

小中学生 150円(団体90円)

両館共通で観覧される場合

高校生以上 510円(団体410円)

小中学生 250円(団体150円)

※傍線の料金は2019年10月より改定となります。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

①岐阜市在住の70歳以上の人

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手

帳の交付を受けている人、およびその介護の方1人

③岐阜市内の小中学生

④家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の人と同伴する家族(高校生以上)の方

企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。

特別展は、その都度料金を定めます。

※2020年1月から1年間、2階総合展示室は大河ドラマ館となります(別料金)。

■ **交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。

岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

博物館だより No.102 2019. 6

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410